

# 成長へ経験と思考が必要

伊藤青少年育成奨学会

田代理事長に聞く



伊藤青少年育成奨学会(多治見市)は、パロ・ホールディングス創業者の故伊藤喜美さんの個人資産を元に設立された公益財団法人だ。長女で理事長を務める田代久美子さん(71)は、奨学金給付事業などを通して20年間、高校生らと接してきた。限られた機会を通して、どんなメッセージを伝えるか。慈善事業の緩やかなイメージとは対極の、真剣な姿勢がそこにある。「若者がどんな人間に育ってほしいか、少しでもその後の人生に立つようという思いで続けている」という田代さんに、若者への思いを聞いた。

(箕浦由美子)

奨学金は2000年以来 気になるのは、子どもも639人に支給。20年度は ちが学校教育で要領の良さ98人の応募があり、最終的 や効率を求められるあまに46人が選ばれた。田代さ り、深くものを考えないでんは1次選考を通過した小 過しているように見える論文全てに目を通し、面接 ことだ。「皆、素直でいいに臨む。会話を交わし、他 子たちですが、精神的に幼の面接者と共に頭を悩ま い子が多い。自分の考えをせ、対象者を絞り込む。 自分の言葉で語れない。そ

## 奨学金給付事業 若者の後の人生を支援

うした経験が少ないのは、本人だけのせいではありません。例えば親がどのような学費をやりくりしているかを知らず、家事の手伝いをしている話も出ないのは、家庭を成り立たせている苦労を親御さんだけが抱え込んでおられるのかもしれない。

それでも浪人生や定時制高校に通ってきた生徒など、「自分なりの挫折体験や社会経験を持つ子はひと味違う」と感じている。何かと闘い、受け止めてきた経験は人を成長させる。そんな思いから、応募者には課題図書を読んで小論文を書くことを求めている。その子なりに問題に取り付き、格闘した思考の軌跡が見たいからだ。

題材とするのは、単純に答えが出ない社会の課題や歴史を扱う本。例えば20

「尊敬する人に両親を挙げる子が多いが、視野を広く持つてほしい」と話す田代久美子理事長。多治見市大針町、伊藤青少年育成奨学会事務局

21年度の「鳥類学者 無謀にも恐竜を語る」は、恐竜の進化を鳥類学を切り口に考える思考実験が展開されている。20年度の「たしか植物」は、植物のしたたかな生存戦略を取り上げた。読みやすく、取っ掛かりはよいが深い内容を扱う良書を田代さん自身が選んでいる。「本当に読んできたの、と問いたくなるような、表面的な言葉を引っ掛けてまとめる子もいます。一生懸命考えて回り道をしながら書いてくれる子もいる。こちらの意図を受け止めてくれた、と感じる時はうれしいですね」

選考はしんどい作業だ。「人間が人間を選ぶのだから、外れがないとはいえない」と受け止めつつ「コロナ禍で学生支援の動きが注目されているが、むしろ時流に左右されないで続けていくことが最も大切だと感じている。(効率優先の)大きな流れにあらがうように、少しでもこれをせき止めるようにという思いで続けています」と話す。